

【小論文】

別紙は、ドストエフスキー「カラマーゾフの兄弟」のうち、「大審問官伝説」と呼ばれる箇所抜粋である(ただし、一部を省略している)。大審問官伝説とは、カラマーゾフの兄弟の次男イワンが、三男アリョーシャに語って聞かせた創作の戯曲である(ただし、原文には改行はないが、わかりやすさのため、何か所か改行を入れている)。

その戯曲は、イエス・キリストが布教活動に入る前に40日間、荒野で断食の修行をしたとき悪魔が3つの試みでキリストを誘惑した「悪魔の誘惑」と呼ばれる聖書の断章を題材としており、その聖書の箇所は、大審問官が「3つの問い」に言及した5頁の枠で囲った部分に「出題者注」として引用している。

以下の問題に社会科学的見地から答えなさい。「社会科学的見地から」とは、聖書・キリスト教の信仰・教義の意義・解釈・異端審問の歴史的意義などを問うているのではなく、社会の規律原理への示唆の問題として理解したうえで解答しなさいという意味である(なお、当時も今日も、キリスト教の信仰・教義の問題として、聖書の「悪魔の誘惑」が大審問官が述べたように一般的に理解されているわけではない)。なお、大審問官の職位である「枢機卿」(3頁下線部)とは、スペインにおける最高位の聖職者である。

問題1 大審問官は、聖書の「悪魔の誘惑」の3つの問とそれに対するキリストの答が何を象徴するものと理解したのか。

問題2 (戯曲によれば)大審問官によると、教会がキリストの死後、1500年間でやってきたのはどのような仕事か。

問題3 なぜ大審問官は問題2のような仕事を行ったのか。

問題4 ドストエフスキーの文学、ことにカラマーゾフの兄弟の大審問官伝説は、予言の書とも評価されてきたが、ウクライナ戦争についてロシア正教会総主教が侵攻を支持していることから、予言の書としての大審問官伝説が改めて注目されている。大審問官伝説に照らせば、ウクライナ戦争は、どのような戦いとして意義を持つといえるのか。

問題5 大審問官伝説は、19世紀に突如、開花したロシア文学が、西洋文学よりも深く「自由」の哲学的意義を問うたものと評価されることがある。あなたは、この伝説の現代的意義についてどのように考えるか、その理由とともに述べよ。

※別紙として、ドストエフスキー著／原 卓也訳『カラマゾフの兄弟（上）』（新潮文庫、1978年）第5編「プロとコントラ」（中略あり）を筆記試験時に配付しました。